

進化と祈り



もし、宇宙が人間の体のようであり、自分がその一つの細胞、または微生物だったら……と、想像してごらん。いったいその宇宙は、何を考え、どんな思いでいることだろうか…。

祈りに力があるという、つい眉に唾をつけてしまいたくなる方も多いただろう。かく言う私も、そんなタイプの一人だった。そうは見えないが一応理系の学部を卒業し、一般企業でバリバリとバブル時代を過ごした者として、論理的で効率重視の考え方がすっかり身についていた。だから、心が大切だとか、祈りだとかは、実利に益することの無い、ただの気休め程度にしか考えられなかったのだ。そんな私が今、「祈り」について書こうとしているのだから、なんだか不思議な気分だ。

映画「祈り」

先日、白鳥哲監督の映画「祈り」を見た。監督の奇跡的な体験談を交えた、聞き応え、見応えたっぷりの講演と上映会だった。

とりあえず、大まかなアウトラインだけ要約すると（かなり乱暴な要約であるが）…

- 祈りには免疫を高め、細胞を修復する力がある。
- 時間、距離を越えて届く（ニューヨークから西海岸の病院へ祈りが届いた）。
- （電磁波の様に）物質や肉体に変化を与えることができる。
- 人間以外の動植物や微生物にも効果が実証された。（イースト菌の実験で実証）



- 地球の磁場が人間の意識波動のゆがみにより悪影響を受けている可能性がある。（地磁気の計測により判明）
- 全ては意識。肉体、人間関係、状況、世界…すべて意識が作り出している。
- 「許し」の祈りは最大の免疫効果をもたらす。それにより監督自身の脳腫瘍が消えた…などなど。（多くは科学的手法で科学者が検証した結果である）

今回は、この上映会のことを重点的に書くはずだった。いつものように書くべきことに思いを寄せ、それこそ祈る気持ちで降りてくる言葉を待った。ところが、出て来るのはいずれも少しニュアンスの違う言葉ばかりだ。いったいどうしたものかと思いつつも、ノートに写し取り、ひとまずワードに打ち込んでみた。かなり支離滅裂だが、本当に文章としてまとまるのだろうか…。どうか以下乱文をお許し下さい。

なぜ人は祈るのだろうか。

もう、どんな手立ても無い、そう感じたとき、人は目に見えない何かに向かって手を合わせる。その透き通った思いは電波のように、大いなる生命全体に響き渡る。そして、それを受信した誰かが、その手を差し伸べてくれるのだ。それを人は奇跡というのだろう。

ずいぶん前のことだが、苦しかったとき、そのように助けられ、奇跡は起きた。そういえばその頃、ことあるごとに神社に参拝に通ったものだ。考えてみたら、そのとき初めて、心から誰かのため祈ることができたのだと思う。

それは偶然だったのかもしれない。しかし、すべてが一つにつながっているのが宇宙の本質ならば、偶然などではなく、当然なのだろう。私たちの思いは常に発信されており、どこかで誰かがそれをキャッチしているのだ。

生命の絆

放射能の垂れ流して汚染された海と空。自然は、地球に暮らす全ての生命体のもの。

そもそも、人間だけのことしか考えられない私たちの感性と価値観、そんな生き方を変える必要があるのかもしれない。

真の平和とは、すべての生命にとっての平和であろう。アリの権利は無いのか。魚や鳥たち、野に暮らす獣たちの権利はどうなのだ。草や木や、微生物たちの権利は…。けっして権利を主張することの無い彼らがいなければ、私たちは一刻も生きることができない。

それにもかかわらず、まるで自分たちだけで生きているかのように、この地上で傍若無人に振舞っている。

生命のことを考えるならば、ちっぽけな自分の肉体のことだけでは完結しない。地球の生態系すべてを考慮しなければ、生命についてわかったなどと言う事はできない。科学はずいぶん進んだように感じるけれど、水一つでさえほとんど何もわかっていないのだ。

その上、私たちがこの星と密接に結びついており、この星そのものの一部であるという物理的事実すら、忘れてしまっている。その考えが地球を壊し続けている元凶だ。

今、取り戻さなければいけないのは、そんな気付きであり、絆なのだ。私たちと生命の絆。この星との絆。

私は地球人でありたい。

戦争という殺し合いで分捕り合った国境。かつ



て宇宙飛行士だった毛利衛さんが「宇宙から見たら、地上に国境線は一つも見えない」と言っていた。ある意味実体の無い、そんな人間が勝手に引いた線のために、そしてその奪い合いのために、更なる争いを起こし、これ以上、尊い生命や自然を失ってはならない。私たちの憲法前文には、その理念が高らかに謳われている。

私は、その高邁な理念を掲げる日本人であるだけでなく、さらに地球人だと叫びたい。他国の人と同じ人間であり、虫や獣や草や木と同じ生きている生命だと。誰もがそう。私たちは、地球という同じ生命を生きているのだ。

そんな綺麗事では生きていられないと、これまで言われてきたが、その綺麗事ではない生き方で、この地球を壊そうとしている。私たちはその事実を目を覚まさねばならない。

“食べていく”ために、これ以上この地球を壊してはならないのだ。生態系はそのキャパを超えてしまっている。経済発展に注ぐ知恵と情熱を、今すぐ地球生命を守るために使う必要があるのだ。

本当のことはみんな知っている。

本当にどうすればいいか、みんな心の中で、魂の奥で気づいている。

本当は 3.11 のあの時に、すでに分かっていたはずなんだ。

人は自然の力の前で、いかに無力かを。その自然に逆らっては、生きていけないことを。

そして、自然と調和した、新しい暮らしのあり方を目指し、大きく方向転換しなければいけないことを。

自然と調和できなかった過去に戻ってはいけない。戦争を肯定し、自然破壊を肯定し、人権を否定する、そんな世界に戻っては、けっしていけない。

どうせ戻るならば、自然と調和した営みを 300 年以上も続けた、世界的にまれにみる環境都市、江戸を見習わなければいけない。もしくは、何万年も自然と共に暮らしてきたアイヌなど先住民

に、謙虚に学ばなければいけない。私たちはすでにその答えを持っているではないか。

資本主義から生命主義へ

前回に続き、また20年前の話になるが、どうして世の中、こうも矛盾だらけなのか…と思い巡らせていたとき、行き着いた先が「経済」のことだった。

実は経済自体に問題があるわけではない。そもそも経済とは「経世済民（世を治め民を救う）」という意味なのだから。

問題は資本が主義のシステムにありそうだと気づいた。

われわれが暮らすこの西側諸国といわれる経済圏は、資本（お金）主義なのだ。だから、お金を多く持つことが一番の正義（大義）となり、そのためだったら、法に触れさえしなければ、何をしても許されるような空気さえ生み出している。お金がなければ生きられない社会だから、皆、血眼になってそれを求め、その事が大切な本質を見失わせ、このように世の多くの問題を生み出す温床になっているのだ。お金が悪いわけではない。交換手段の一つに過ぎないそれを、主義にしまったことが問題なのだ。

生命の仕組みに基づいた、新しい経済のあり方が今、求められているのではないか。この自然界はあらゆるものが互いに補い合うことによって成り立っている。人や生命を愛し、豊かにすることで回る、生命主義、または自然主義の経済システムを、これから先、創り上げて行く必要があるだろう。



真に進化すべきは、こころ

物質文明そのものが悪いとは思わない。科学や技術もまた、必要があってこの世に生まれたものだと思える。

しかし、科学や物質が進化すれば、人類も自動

的に進化するわけではないのだ。

むしろ、今のように自然を汚し続けなければ生きられない、いまだ戦争をやめられない我々人類は、種として滅亡の方向へまっしぐらの、退化した存在と言えるのではないか。

道具は本来、喜びをもたらすために生まれた。それは人を重労働や単純作業から解放し、精神の進化へ貢献するためではなからうか。人類が、その精神性を花開かせて、自然や人々と調和したパラダイスを、この地上に生み出すためにもたらされたのだ。

資本を増大させる（儲ける）ためや、人々をモノに隷属させる（夢中にさせる）ため、市場のシェア争いに躍起になるために、この世にあるわけではないと思うのだ。

大切なことは、道具や科学の進化ではない。重心の置き方、バランスが問題だ。

それらはすべて、人間の霊性の進化のために与えられたと理解しなければいけない。

主軸は生命にあり、真に進化すべきは私たちのころなのではないか。

人類が文明という木の実を得てから数千年来隠されてきたその真実は、大地の中に、大地と共に生きる人々の中に、そして目の前の身近な自然の中に、ひっそりと息づいてきたのだ。

今ならまだ、ギリギリ間に合う。

私たちの意識と霊性の進化が、文明の弊害を乗り越え

え、この地上を生命の楽園にすることだって、実はそんなに難しくない。こころの問題なのだから。

そう、私たち、一人一人に突きつけられた、心の中の問題なのだ。

そして、その方向性は、私たちすべてが自然を介して一つにつながっていると気付くことだ

う。それは、互いに思いやりを持って仲良くするという、小学生でも知っているその当たり前のことを、大人の私たちができるようになることでもある。

すべてがつながっていると考えて、誰に対しても、どんな生命に対しても、目の前にあるすべてに、自分自身を観ること。どんなに理解できない人の中にも、必ず自分の姿が重なるポイントがあるはずなのだ。

次に、そのどうしようもない自分自身すらも、心の中で愛することだ。白鳥監督も講演の中で語っていたが、許し、受容し、自らに心から謝る。そうやって自分を愛すること、許すことが大切だ。すると、それまでそびえ立っていた見えない壁が、一瞬の内に消え去り、やわらかな空気に包みこまれることだろう。平和



が心を包むのだ。(そうするうちに、彼の脳幹にできた腫瘍は、すっかり消えてしまっていたという。)

さらに、日々の暮らしの中で繰り返しそれを実践することで、一人の心が晴れやかに解放されたなら、どれほど周囲に良きエネルギーを放つことか、想像してみよう。逆に、良くない思いを発信したらどうなるだろうか…。

それが、私たちに与えられた、“力”なのだ、と思う。

そして、もう少しだけその先を想像してみしてほしい。もし、多くの人が「許しと愛」を実践し、そんな全てと一体になった価値観を自分のものとしたならば、世界はどうなるだろうか…。

そこには争いも、個人主義も、民族主義さえ超えた、こころ穏やかな人々の暮らす、自然や、あらゆるものと調和した、うるわしい世界が垣間見える。

それこそが、本来、私たちがたどり着くべき、未来の姿なのだ。

ピンチはチャンス

絶体絶命のピンチは、人生において不意に訪れる。もうだめかもしれない…。そんな思いが頭の中をよ

ぎる。傷つき、ボロボロになり、何とか立ち上がる…。

過ぎ去ってみれば、そのときの出来事があったお陰で、今の自分があることにふと気付く。少しは人の痛みがわかり、心を寄せることができるようになったのではないか。あの苦しみが無ければ、何と薄っぺらで軽い人間のままだったことだろう。逆にそれが無ければ、気付けなかったのかも知れない、とさえ思う。

今にして思えば、その困った状況こそが、まるで宝箱のようなものではないか。

その中には常にふたつの宝物が用意されている。ひとつは「嘆きと絶望」、もうひとつは「学びと成長」。私たちには、そのどちらでも選ぶ自由が与えられているのだ。

そして“祈り”は、絶望の只中にある私たちに、「希望」というもう一つの宝を与えてくれる。ピンチをチャンスとし

て活かせるかどうかは、私たち(の心)次第なのだ。

祈ること、そして深く魂の声に耳を傾け行動すること。すべての人に等しく与えられている創造の力を、私は信じている。

祈りと共に生み出される新しい世界。それは今、まさに私たちの心の中にあるのだ。

すべてを委ねる

時々、もうジタバタしてもしようがないという域に達することがある。

そんなとき、あらゆることを肯定し、あとは大いなるものに任せよう、すべてを委ねよう、そんな風に思うようになった。もちろんできる限りのことはするのだが、そう思えば、とても心が軽くなり、逆に不思議と力がみなぎってくるようだ。

冒頭に書いたように、もし、宇宙が大いなる生命であるならば、そこには“意思”があると思うのだ。宇宙のちっぽけな細胞としての自分は、その心を鑑み、その思いにできるだけ従ってみようと思う。

それはきっと、あらゆるものの調和を司る、愛の調べではなからうか。

(編集部 島田 浩)